

序

『日本目録規則 2018 年版』はなぜわかりにくいのか

『日本目録規則 2018 年版』（以下 NCR2018 と表記します）は予備知識や技術的な背景なしにこれだけを読んで目録を作成するためのものではありませんし、規則の内容自体は難しくはないにもかかわらず、一見したところ難しく感じられることがあります。その理由としては以下のことが挙げられます。

「著作」「表現形」「体現形」「個別資料」

これまで使われてきた『日本目録規則 1987 年版』（以下 NCR1987）は章のタイトルが「図書」「書写資料」「地図資料」等となっていて、目録規則を初めて見る人でも特定の資料の規則を知りたい場合にどこを見ればよいかの見当が付けられました。しかし NCR2018 の目次を見ると「著作」「表現形」「体現形」「個別資料」等に分かれていて、どこにどのような規則が書かれているのか想像が付かないため、一見すると難しそうに思えます。しかしこれは従来一枚のカードに記録してきた情報を、この四つの部分に分けて考えようという考え方の枠組みの現れであり、実際に記録する情報自体はそれほど大きく変わっていません。四つの部分に分けて考えたうえで、従来のようにまとめて一つのデータを作成したり、一枚のカードに記述したりすることも可能です。

完成形のイメージが無い

NCR1987 は、基本的に目録カードを作成するための規則でした。

目録カードは記録したものがそのまま完成形であり、図書館員も利用者也それを見て資料を探します。そのため目録規則に基づいて目録を作成すれば標準的な完成形ができあがるようになっていました。しかし現在では目録情報をコンピューターのデータベースで管理することが多くなっています。コンピューターではデータを入力する画面と表示する画面が異なるのが普通です。NCR2018はコンピューターのデータを作成することを考えて、データを表示するレイアウトや方法は規定せず、入力する項目とそのデータの内容のみを規定しています。そのため規則の中では目録の完成形が提示されないので作業のイメージがつかみにくくなっています。

例が部分のみ

NCR1987では目録カードに記録する際に、複数の情報をつなげて記録することがありました。例えば責任表示の例として「生命の解放」：「細胞から社会まで」／「チャールズ・バーチ，「ジョン・B・コップ著」；「長野敬，「川口啓明訳」のようにタイトルも含めた記述の仕方が記載されています(2.1.5.1D)ので、これを見ればタイトルと責任表示の記録がどのようなものになるのか一目瞭然です。しかしNCR2018では個々の項目が独立したエレメント(要素)になりましたので、責任表示のみが、しかも役割ごとに別のエレメントとして「チャールズ・バーチ，ジョン・B・コップ著」「長野敬，川口啓明訳」のように細切れに例示されています。例示されている責任表示自体の情報には相違がないにもかかわらず、例を見てもどのようなデータを作成するのかがイメージしにくくなっています。

異なる資料種別の規則が混在している

規則は資料種別（資料の種類）によって分けられているのではなく、記録するエレメントごとにまとめられています。異なる資料種別の規則がまとめられているため、それぞれのエレメントの規則の分量が多くなっています。その中で特定の資料種別の規則が独立している項目もあれば、他の資料種別の規則と混在しているところもあります。そのため特定の資料の規則を知るためには必要な箇所を自分で取捨選択する必要があります。例えば「#5.22 所要時間」や「#5.23 尺度」という条項がありますが、これがどの資料に適用されるエレメントなのかは本文の規定を読まないといけません¹。また、地図帳は冊子ですが、これの数量は「#2.17.1.1 冊子 1 冊の資料」ではなく（これは「テキストの数量」の規則です）、「#2.17.3 地図資料の数量」の「#2.17.3.1 地図帳」を参照します。あるいは、「#2.8 非刊行物の制作表示」「#2.30 映画フィルム of の映写特性」のように項目名に適用対象の資料種別が明示されているものもありますが、逐次刊行物の責任表示については「逐次刊行物の責任表示」のような項目はなく、「#2.2 責任表示」の「#2.2.0.4 記録の方法」の最後に、「逐次刊行物については、個人編者は、識別に重要な場合に限定して、責任表示として記録する。」とあるだけなので、本文を読まないと特別な規則があるかどうかを知ることができません。

他の条項を参照することが多い

NCR2018 では、共通する規則をまとめようとする意識が強く働

1：「所要時間」は録音資料や映像資料の再生時間以外にも、資料の実行、実演に要する時間も含まれます。また、「尺度」は地図、静止画、三次元資料に適用します。

いています。そのため、ある規則の中で別の条項を参照している箇所が多々あり、知りたい項目だけを見ても十分な規則を知ることができないことがあるため少々面倒に思うことがあります。

以上のような理由から、一見するとわかりにくく感じるがありますが、規則自体はそれほど難しいものではありません。本書がNCR2018を読み解く手がかりとなれば幸いです。

2023 年 7 月 31 日

蟹瀬 智弘

目次

序 『日本目録規則 2018 年版』はなぜわかりにくいのか i

本書の構成 xiii

I 部 『日本目録規則 2018 年版』の概要

1. 資料のとらえ方……………3
 - (1) 著作・表現形・体現形・個別資料（第1グループ=資料）
3
 - (2) 個人・家族・団体（第2グループ） 8
 - (3) 概念・物・出来事・場所（第3グループ=主題） 11
 - (4) 刊行方式，書誌階層構造，基礎書誌レベル 13
2. エレメントの記録：実体，属性，関連……………14
 - (1) エレメント 14
 - (2) 属性 15
 - (3) アクセス・ポイント，識別子 15
 - (4) 関連 18
3. 全体の構成……………38
4. 実装……………39
5. 別法と任意規定……………40

II 部 規則の解説

- 1 章 実体ごとの規則……………45
 1. 個人……………45

(1) 個人の属性	49
(2) 個人の関連 (#46)	52
2. 家族	52
(1) 家族の属性	53
(2) 家族の関連 (#46)	53
3. 団体	54
(1) 団体の属性	55
(2) 団体の関連 (#46)	57
4. 概念, 物, 出来事, 場所	59
5. 著作	59
(1) 著作の属性	61
(2) 著作の関連	70
6. 表現形	77
(1) 表現形の属性	78
(2) 表現形の関連	82
7. 体現形	88
(1) 体現形の属性	91
(2) 体現形の関連	107
8. 個別資料	110
(1) 個別資料の属性	110
(2) 個別資料の関連	111
2章 資料種別ごとの規則 —————	113
1. 図書	113
(1) 図書の著作	113
(2) 図書の表現形	114

(3) 図書の体現形	115
2. 逐次刊行物	122
(1) 逐次刊行物の著作	124
(2) 逐次刊行物の表現形	126
(3) 逐次刊行物の体現形	127
3. 録音資料 (小説の朗読)	129
(1) 録音資料 (小説の朗読) の個人	130
(2) 録音資料 (小説の朗読) の著作	130
(3) 録音資料 (小説の朗読) の表現形	131
(4) 録音資料 (小説の朗読) の体現形	134
4. 動画資料 (映画 Blu-ray)	138
(1) 動画資料 (映画 Blu-ray) の著作	138
(2) 動画資料 (映画 Blu-ray) の表現形	140
(3) 動画資料 (映画 Blu-ray) の体現形	142
5. 地図資料	146
(1) 地図資料の著作	146
(2) 地図資料の表現形	147
(3) 地図資料の体現形	149

Ⅲ部 これまでの目録規則の考え方と NCR2018

1 章 NCR1987 とそのデータ	155
1. 目録とは	155
(1) 記述	156
(2) 標目	156
(3) 典拠ファイル	157
(4) 所在記号	158

(5) 目録	158
2. 部と章の構成	159
2 章 カード目録から OPAC へ	160
1. OPAC	160
(1) 記述と所在記号 (書誌データと所蔵データ)	160
(2) 標目	161
(3) 典拠データ	162
2. 入力・表示環境	162
3. データの出力	164
3 章 NCR1987 から NCR2018 へ	168
1. 記述	168
2. 標目	168
参考文献	171
付録：NCR2018 の全体目次	173
索引	183

〈図目次〉

図 1	NCR2018 における資料のとらえ方 (1)	5
図 2	NCR2018 における資料のとらえ方 (2)	8
図 3	資料と関係する個人・家族・団体 (概要)	10
図 4	個人と関係する資料	10
図 5	著作と関係する主題	11
図 6	NCR2018 が依拠する概念モデルの概要	12
図 7	カレーの材料の記述 (属性による)	18
図 8	カレーの材料の記述 (関連による)	19
図 9	カレーの材料 (関連) と野菜の属性	20
図 10	カレーの材料 (識別子による関連) と野菜の属性	21
図 11	NCR2018 における関連の種類	22
図 12	資料に関する基本的関連	24
図 13	資料に関するその他の関連	25
図 14	著作間の関連指示子 (部分)	27
図 15	著作間の関連にあつて表現形間の関連にない関連指示子	28
図 16	表現形間の関連にあつて著作間の関連にない関連指示子	28
図 17	表現形間の関連にあつて個別資料間の関連にない関連指示子	29
図 18	個別資料間の関連にあつて表現形間の関連にない関連指示子	30
図 19	資料と個人・家族・団体との関連	31
図 20	別法の例	41
図 21	個人の典拠形アクセス・ポイントの構造	51
図 22	団体の典拠形アクセス・ポイントの構成	56
図 23	『君の脾臓をたべたい』冒頭 (双葉社ジュニア文庫)	64
図 24	『君の脾臓をたべたい』冒頭 (単行本)	64
図 25	著作の典拠形アクセス・ポイントの構造	65
図 26	『図書館戦争』の著作間の関連	74
図 27	表現形の典拠形アクセス・ポイントの構造	81
図 28	表現形の典拠形アクセス・ポイントの例	81

図 29	表現形間の関連	86
図 30	一般的な著作—表現形—体現形の関連	86
図 31	表現形間の関連を記録する場合	87
図 32	内容に相違のある版表示の記述	96
図 33	入れ物の相違のみを表す版表示の記述	96
図 34	『無気力の心理学』初版	97
図 35	『無気力の心理学』改版	98
図 36	内容に相違のない版表示の記述	99
図 37	岩波文庫版『高慢と偏見』初版（左）と改版（右）	99
図 38	ワイド版岩波文庫の実体と関連	109
図 39	雑誌の情報源	124
図 40	目録カードの例（NCR1987）	155
図 41	CiNii Books における書誌データと所蔵データ	161
図 42	NDL ONLINE における書誌データと所蔵データ	163
図 43	CiNii Books の書誌データ	164
図 44	国立国会図書館サーチのダウンロードメニュー	165
図 45	CiNii Books の書誌データの RDF フォーマット	166
図 46	簡略な書誌データ（XML フォーマット）	167
図 47	簡略な書誌データ（JSON フォーマット）	167

〈表目次〉

表 1	書誌階層構造と基礎書誌レベル	14
表 2	おもな属性の例	16
表 3	資料と個人・家族・団体との関連指示子（抜粋）	32
表 4	個人のデータ（オースティン）	45
表 5	個人のデータ（中野好夫）	46
表 6	個人のデータ（大和資雄）	47
表 7	コア・エレメント（個人）	47
表 8	コア・エレメント（家族）	52

表 9	団体のデータ（新潮社）	54
表 10	コア・エレメント（団体）	54
表 11	団体のデータ（中央公論新社）	58
表 12	団体のデータ（中央公論社）	58
表 13	著作のデータ	59
表 14	コア・エレメント（著作）	60
表 15	創作者とみなす団体	67
表 16	著作間の関連指示子（抜粋）	70
表 17	著作と関連する主題の記録	76
表 18	表現形のデータ（自負と偏見）	77
表 19	コア・エレメント（表現形）	77
表 20	表現形間の関連指示子（抜粋）	82
表 21	体現形のデータ（『自負と偏見』）	88
表 22	コア・エレメント（体現形）	89
表 23	タイトル関連情報の例	92
表 24	タイトルに併記された小さな文字の扱い	93
表 25	出版者の所在地と出版地のデータ	100
表 26	サブシリーズが二つある例	103
表 27	サブシリーズと番号	105
表 28	体現形間の関連指示子（抜粋）	107
表 29	個別資料のデータ	110
表 30	コア・エレメント（個別資料）	110
表 31	個別資料間の関連指示子（抜粋）	111
表 32	図書の著作データ	113
表 33	図書の体現形データ	115
表 34	図書の表現形データ（1）	117
表 35	図書の表現形データ（2）	118
表 36	図書の体現形データ（オースティン；ブロンテ）	119
表 37	図書の体現形データ（『高慢と偏見』 岩波文庫）	120

表 38	雑誌の著作データ	124
表 39	雑誌の表現形データ	126
表 40	雑誌の体現形データ	127
表 41	個人のデータ（又吉直樹）	130
表 42	著作のデータ（火花：小説）	130
表 43	個人のデータ（堤真一）	131
表 44	録音資料の表現形データ	132
表 45	録音資料の体現形データ	134
表 46	数量に用いる助数詞（録音資料の部分）	135
表 47	映画の著作データ	138
表 48	映画の表現形データ	140
表 49	映画 Blu-ray の体現形データ	142
表 50	数量に用いる助数詞（動画資料の部分）	144
表 51	地図資料の著作データ	146
表 52	地図資料の表現形データ	147
表 53	地図資料の体現形データ	149
表 54	NCR1987 と NCR2018（体現形の属性）のおもな記述の違い	170

●本文中の URL はすべて 2023 年 8 月に確認しています。

本書の構成

本書ではⅠ部でNCR2018の概要を解説し、Ⅱ部で個々の規則を紹介していきます。Ⅱ部1章でそれぞれの実体ごと、2章で資料種別ごとに、記録する情報を解説していきます。解説する実体の順番はNCR2018とは異なり、個人のデータから始めます。アクセス・ポイントを構築したり、他の実体との関連を記録する規則を説明したりする際に、まだ説明していない規則を参照することを避けるためにはこの順番が合理的だと考えています。最後にⅢ部でこれまで使われてきたNCR1987がどのような目録規則だったのかを振り返り、どのようにNCR2018へと変わったのかを簡単にたどります。

NCR2018は「書誌レコードの機能要件 (FRBR)」と呼ばれる概念モデルに基づいて考えられています。また、同じくFRBRに基づいて作成された目録規則である「RDA (資源の記述とアクセス)」に基づいて作成されたデータを相互に利用できるように考えられています。本書ではNCR2018のみを解説していきますが、これを理解するためにその背後にあるFRBRやRDAを参照することもあります。また、比較のためにNCR1987の規程に言及することもあります。NCR2018を理解するためにはこれらの規則や概念モデルの知識はなくても問題ありません。

なお、本文中に“#2.1”のように“#”が付いている数字はNCR2018の章節番号を表します。

I 部

『日本目録規則 2018 年版』の概要

1. 資料のとらえ方

(1) 著作・表現形・体现形・個別資料 (第1グループ=資料)

イギリスの作家ジェーン・オースティンに『高慢と偏見』という小説があります。野上豊一郎が大正 15 (1926) 年に翻訳して以来、これまでに 10 人以上の訳者が翻訳しています。それでは一番新しく日本語に翻訳されたものはどれでしょうか。

国立国会図書館の蔵書が検索できる NDL ONLINE を使用して、詳細検索でタイトルとして「高慢と偏見」で検索してから表示を「出版年:新しい順」にしてみると、一番上に表示されるのは『オースティンの『高慢と偏見』を読んでみる:「婚活」マニュアルから「生きる」マニュアルへ』です。これは小説『高慢と偏見』そのものではありません。「高慢と偏見」というタイトルの資料を検索したつもりだったのですが、実際には“タイトルに「高慢と偏見」という語が含まれる”という条件で検索したために、『高慢と偏見』という小説そのものではないこの本もヒットしてしまいました。次に表示されているのは大島一彦訳『高慢と偏見 (中公文庫; オ 1-5)』です。出版年は 2017 年 12 月ですが、この図書は文庫版ですので、文庫化される前に単行本として刊行されていた可能性もあります。もしそうなら翻訳としては古いのかも知れません。そこで「著者標目」の「大島, 一彦, 1947-」の行の右端にある虫眼鏡のアイコン「著者標目で NDL オンラインを再検索する」をクリックしてこの訳者の資料を検索してみると、他には出版されていないようなので、この文庫版が最初ようです。タイトルで検索しただけではこのことはわかりません。というわけでこの大島一彦訳が最新のように思われます。

4 I 部 『日本目録規則 2018 年版』の概要

しかしじつはこれよりもさらに新しい翻訳が出版されています。あさ出版パートナーズから 2020 年に刊行されたパーカー敬子が訳したものです。この翻訳がなぜ最初の検索でヒットしなかったのかというと、この日本語版のタイトルが『誇りと偏見』だからです。この小説にはほかにも『自負と偏見』（中野好夫訳、小山太一訳）という日本語タイトルもあります。このように、同じ小説でも翻訳によってタイトルが異なることもありますし、内容が改訂されたときにタイトルが変更されることもあります。

これまで使用されてきた『日本目録規則 1987 年版』（以下 NCR1987 と表記します）では、資料の外見を重視してきました。資料の特定の場所に表示されているタイトルがその資料を探すためのタイトルとして扱われてきたため、内容が同じでも表示されているタイトルが異なると検索できませんし、検索した語がタイトルに含まれていれば内容が異なってもヒットします。そのため、同じ内容でも本のタイトルとして表示されているものが異なる場合には一回で確実に検索する方法がありませんでした。『高慢と偏見』のような翻訳本については NDL ONLINE や CiNii Books では原タイトルの「Pride and prejudice」からも検索できるようにシステムで対応していますが、すべての書誌データに原タイトルが記録されているわけではありませんし、少なくとも原タイトルから検索できるようにするという目録規則ではありませんでした。

『日本目録規則 2018 年版』（以下 NCR2018）では、今回のようにオースティンの『高慢と偏見』の日本語訳を検索する際に、日本語のタイトルが何であっても確実に検索できるように考えられています。

そのために、資料そのものについての情報を、本の内容に関する

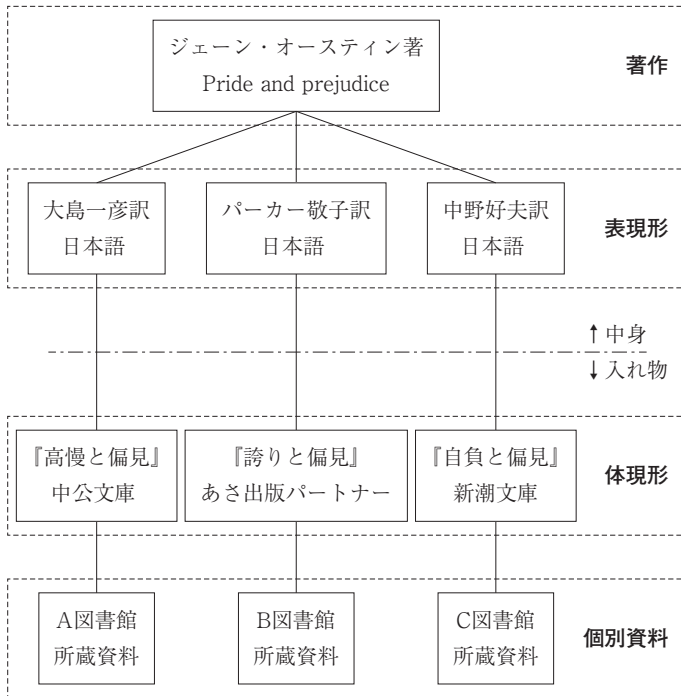


図1 NCR2018における資料のとらえ方(1)

情報と外見(入れ物)の情報を区別して「著作」「表現形」「体现形」「個別資料」という四つの実体に分けて考えます(図1)。「著作」と「表現形」が内容で、「体现形」と「個別資料」が入れ物です。「実体」といっても現実には存在するものという意味ではなく、目録のデータの部分を指します。四つの実体に分けて考えることで、ジェーン・オースティンの *Pride and prejudice* という一つの小説が、異なる訳者によって異なる日本語のタイトルが付与されてい

る状態がわかりやすく整理されます。この「著作」「表現形」「体现形」「個別資料」をまとめて第1グループまたは「資料」と呼ぶこともあります。

それぞれの定義は、著作は「個別の知的・芸術的創作の結果、すなわち、知的・芸術的内容を表す実体」、表現形は「文字による表記、記譜、運動譜、音声、画像、物、運動等の形式またはこれらの組み合わせによる著作の知的・芸術的実現を表す実体」、体现形は「著作の表現形を物理的に具体化したものを表す実体」、個別資料は「体现形の単一の例示を表す実体」となっています（#0.3.1）が、目録作業の際にこれらの実体を認識するのはこの逆方向です。つまり、手元にある1点の図書は個別資料で、同じ本が複数あったとすると、それらは同じ一つの体现形と捉えられます。この体现形の中に収録されているテキストが表現形で、表現形から言語や版の相違を取り除いたものが著作です。

なお、図1のように一つの著作が複数の表現形として実現されることはありますが、その逆に一つの表現形が複数の著作を実現することはありません。一つの表現形が実現する著作は一つだけです（FRBR 3.1.1）。したがって、著作が異なれば表現形も必ず別の表現形となります。

ところで、中野好夫訳は新潮文庫や『世界文学全集（14）』『世界文学大系（28）』（いずれも筑摩書房刊）などで読むことができます。同じ内容の翻訳が、いろいろな形態の図書として刊行されているのです。この場合は一つの表現形が異なる体现形として具体化されていると考えます。

さらに『世界文学大系（28）』は『オースティン ブロンテ』というタイトル¹が付けられていて、『自負と偏見』と一緒にE.ブロンテ

の『嵐が丘』も収録されています。異なる作品が一冊の図書に収められているのです。この場合は異なる表現形が一つの体現形に具体化されていると捉えます。先ほど一つの表現形が実現する著作は一つだけであると書きましたが、一つの体現形には複数の表現形が具体化されることがあるのです。また、一つの体現形は複数の個別資料として例示されるのが一般的ですが、一つの個別資料が例示するのは一つの体現形のみです。

これを先ほどの「著作」「表現形」「体現形」「個別資料」の四つの実体に分けて図にすると図2のようになります。同じ中野好夫訳の『自負と偏見』が異なる図書で読めることや、『オースティン ブロンテ』というタイトルの図書の中に『自負と偏見』と『嵐が丘』が収められていることを表すことができます（データの記述例は表34～36）。

1: 「オースティン ブロンテ」を著者名と考えることもできますが、ここではNACSIS-CATに合わせてタイトルとみなしています。

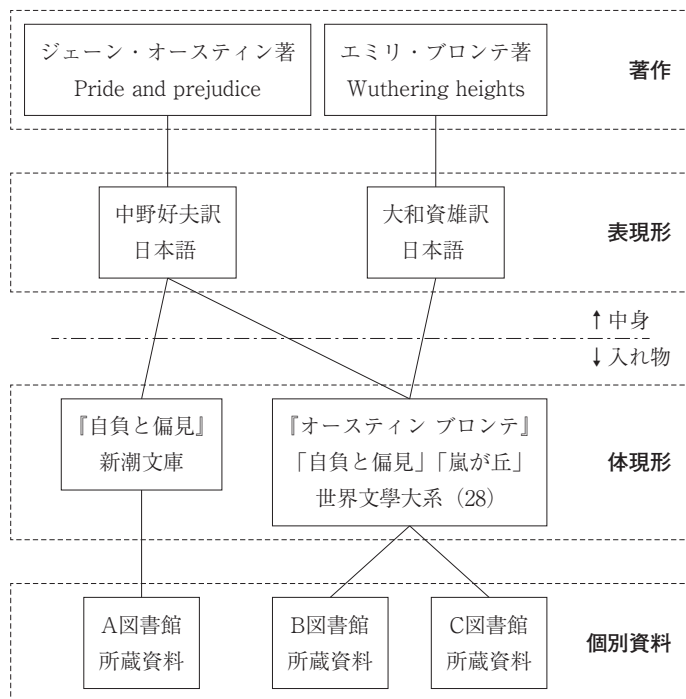


図2 NCR2018 における資料のとらえ方 (2)

(2) 個人・家族・団体 (第2グループ)

このように原タイトルからたどることで、資料に表示されているタイトルにかかわらずすべての資料を検索できるようになりました。それでは著者名はどうでしょうか。著者名も「ジェーン・オースティン」だけでなく「ジェイン・オースティン」「オースティン」「オースチン」などの表記がされています。このようにさまざまな表記がされている資料をまとめて検索するために、特定の個人がか

かわったすべての資料を一つの名称で検索できると便利です。そこで NCR2018 では個人についてのデータを作成して資料を表すデータと関連付けておき、その個人が関わった資料を検索・表示できるようにします。

ところでその資料と関わるのは個人だけではなくありません。団体が編集・発行する図書もあります。NCR2018 では「知的・芸術的成果を生み出す主体」として著者や訳者、出版者などとして資料と関わる実体である「個人」「家族」「団体」を設定し、第2グループと呼んでいます²。

図3では著作が著者である「ジェーン・オースティン」という個人と関係していることをはじめ、表現形が訳者である「中野好夫」と、体現形が出版者である「新潮社」と、個別資料が所蔵館である「A 図書館」とそれぞれ関係していることが表されています。

個人を実体としてとらえることで、この個人が関係する資料を網羅的に探すことができるようになります。例えば中野好夫は『私の憲法勉強』という著作も著しています。つまり中野好夫は「自負と偏見」に対しては訳者として関連し、「私の憲法勉強」には著者として関連することになります。これを表したのが図4です。

2：RDA では2017年版からこれらの総称として「エージェント（行為主体）」という語を使用していますが、NCR2018では採用していません。

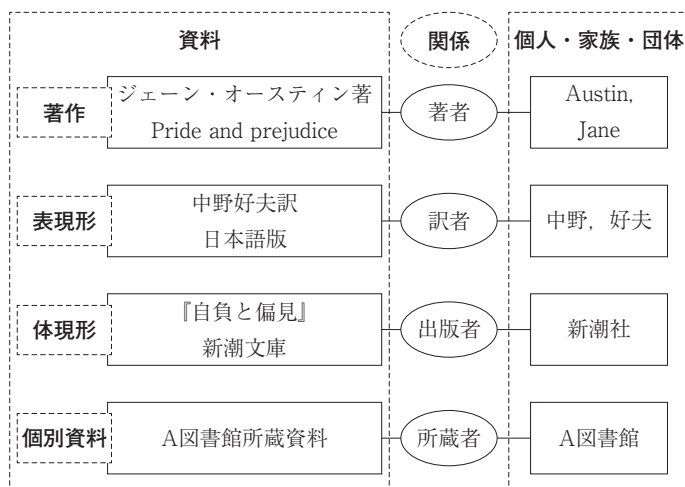


図3 資料と関係する個人・家族・団体（概要）

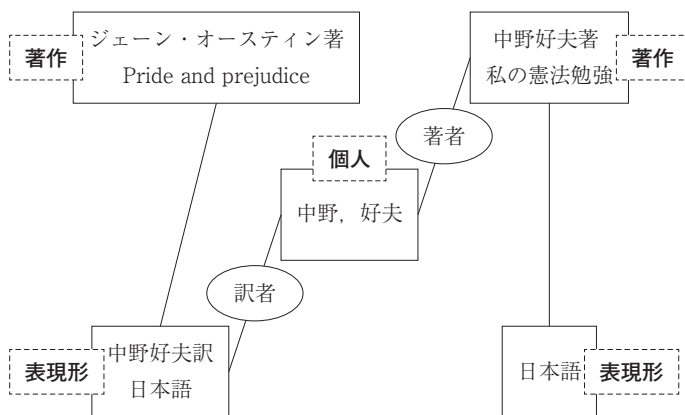


図4 個人と関係する資料³

3：体现形と個別資料は省略しました。

(3) 概念・物・出来事・場所 (第3グループ=主題)

資料を探す手がかりとして、書名や著者名がよく使用されますが、それ以外にも重要な検索があります。それは資料の主題から検索する方法です。タイトルや著者名がわからないときなどに、あることについて書かれた資料を探す場合です。そのために主題を表す「概念」「物」「出来事」「場所」という実体を設定して第3グループまたは「主題」と呼んでいます。主題をもつのは著作だけです。著作と主題を関連付けます。なお、主題となるのはこの第3グループだけでなく、第1グループの資料や第2グループの個人・家族・団体も主題となることがあります（詳しくはⅡ部1章5(2) e. 資料と主題との関連 (#45, 保留) 参照)。

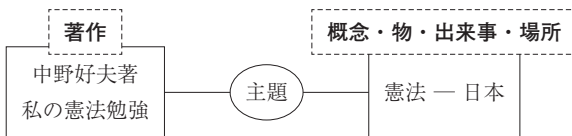


図5 著作と関係する主題

以上みてきたように NCR2018 で記録する実体は第1から第3までの三つのグループに分かれていますが、第1グループと第2、第3グループではグループの括り方が異なります。第1グループは資料そのものを表します。目録を作成する記述対象の資料は通常手元に1点ありますが、この1点の資料を四つの部分に分けて捉えたのが第1グループです。ですから第1グループに属する著作—表現形—表現形—個別資料は物理的にはもともと一つの存在です。それに対して第2グループの個人・家族・団体や第3グループの概念・

Ⅱ 部

規則の解説

- 1 章 実体ごとの規則
- 2 章 資料種別ごとの規則

Ⅲ 部

これまでの目録規則の考え方と NCR2018

- 1 章 NCR1987 とそのデータ
- 2 章 カード目録から OPAC へ
- 3 章 NCR1987 から NCR2018 へ

著者プロフィール

蟹瀬 智弘 (かにせ・ともひろ)

1960年生 慶應義塾大学大学院修士課程修了 社会学修士

藤女子大学 図書館情報学課程教授（特別任用教員）

(株)紀伊國屋書店 LS 人材開発部等を経て、2021年4月より現職

日本図書館協会分類委員会委員（2017～）

著書に『RDA 入門』（共著、日本図書館協会、2014）、『NDC への招待』（樹村房、2015）、『やさしく詳しい NACSIS-CAT』（樹村房、2017）、『情報資源組織論及び演習』（共著、学文社、2020）、『三訂 情報資源組織演習』（共著、樹村房、2021）

NCR2018の要点解説 資源の記述のための目録規則

2023年9月7日 初版第1刷発行

検印廃止

著者 蟹瀬 智弘
発行者 大塚 栄一

発行所 株式会社 樹村房
〒112-0002
東京都文京区小石川5丁目11番7号
電話 03-3868-7321
FAX 03-6801-5202
<https://www.jusonbo.co.jp/>
振替口座 00190-3-93169

組版・印刷／美研プリンティング株式会社
製本／有限会社愛千製本所

©Tomohiro Kanise 2023 Printed in Japan

ISBN978-4-88367-383-4

乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。